

児童期から思春期の被養育体験と 青年期の抑うつ傾向の関連について

藤木 由佳

浦安市教育総務部指導課

松壽 くみ子

跡見学園女子大学文学部臨床心理学科

要 旨

児童期から思春期の被養育体験と青年期の抑うつ傾向の関連について検討することを目的とした。青年期の抑うつ傾向を量的に測定し、その高低による、被養育体験の相違を質的に捉えるミックス法を用いた。まず、大学生181名を対象に、児童期、思春期の被養育体験に関する記述式アンケートへの協力を依頼するとともに、CES-Dを施行した。調査依頼に対して同意が得られた19名のうち、CES-D得点によって、低群（0-8点）、中群（9-15点）、高群（16-22点）に分けることができた13名に対して、記述式アンケート調査を実施した。得られた記述データをもとに質的分析を行った。その結果、10カテゴリー、21下位カテゴリーが抽出された。母親の養育態度を示す10のカテゴリーは、＜悲しみを感じた母親の行動・態度＞＜怒り＞＜叱責＞＜具体的な行動ではなく、態度で嬉しかったこと＞＜母親のしてくれた行動で嬉しかったこと＞＜自分が起こした行動をうけて母親がしてくれた嬉しかったこと＞＜過去を想起して抱く負の感情＞＜過去を想起して抱く正の感情＞であった。低、中、高群の違いは、「正当なしつけ」、「暴力」、「完璧な達成への褒め」などと関連がみられた。この結果により、青年期の抑うつの予防的な関わりについての有用な視点を得ることができた。

1. 問題

1) 日本における抑うつの現状

厚生労働省が3年ごとに全国の医療施設に対して行っている日本における抑うつの現状によると、「平成8年には43.3万人だったうつ病等の気分障害の総患者数は、平成20年には104.1万人と12年間で2.4倍に増加している」と示されている（厚生労働省、2010）。また、患者調査は、医療機関に受診している患者数の統計データだが、うつ病患者の医療機関への受診率は低いことがわかっており、実際にはこれより多くの患者がいることが推測されている（厚生

労働省、2010）。DSM-IVの診断基準は、「抑うつ気分」と「興味・喜びの喪失」の2つの主要症状が基本となる。なかでも「青年期に該当する大学生は、抑うつ傾向が高いという報告がされており、重篤な抑うつ状態に陥る前の予防的介入の必要性が指摘されている」（川人、2002）。

さらに、抑うつ状態になる危険因子の一つとして、「つらい被養育体験」が報告されている（厚生労働省、2007）。

2) 被養育体験に関する先行研究

これまで、青年期を対象にした親子関係と被養育体験の研究では、「青年期に子ど

もが親に対して抱く感情は、幼少期に親から受けてきた養育をどう認識しているかと深く関連している」といわれている（小林、2002）。市毛、大河原（2008）は、「幼い頃から親に、よい子であることを過剰に求められ、ネガティブな自分を拒否される経験は、子どもの本来の発達を妨げ、生涯にわたって生きにくい状態に陥る可能性を高めることが予想される」と述べている。さらに、山川（2001）は、「自分の感情よりも周囲からの期待を重視して、評価が高くなるように振るまう子を作り出す環境要因のひとつとして、親の過剰な期待があり、それによって子どもの自己抑制が求められていることと、親の過剰配慮や過干渉、無関心や放任など」を挙げている。成人期を対象にした母子関係と被養育体験の研究では、北村（2008）は、「過去の愛着感情の想起が安定している場合は現在の母親に対して親密的な感情を抱く傾向にある」としている。

性差をみている先行研究では、「男性は、現在の両親からのサポートを感じることで抑うつ感の低減に有効であるが、女性の場合は、現在のサポートだけではなく、過去のサポートやその記憶が有効である」ことが指摘されている（奏、2005；北村、2008）。

以上のように、被養育体験と青年期の精神的健康との関連が示されてきた。しかし、被養育体験と抑うつ傾向の先行研究は多いとは言えず、被養育体験については、量的データを用いた回顧的な方法での研究が中心である（小林・山内、2002；杉久保、2009；小川・鈴木・堀、2003）。

被養育体験について質問紙を用いて過去

の記憶の再生を求めることは、人が主観的にどう感じてきたかを検討するのには限界があると考えられる。

田中・三浦（2010）は、大学生の被養育体験に関する意識について、質的に研究している。女子大生を対象に、受けたしつけに対する認知とどのようなものを記憶しているか、予備調査で自由記述を求めて、得られた結果から、現在の大学生世代が経験したと認知している親からのしつけについての特徴を把握する尺度を作成している。

2. 目的

本研究では、青年期の抑うつ傾向の高低（量的データ）によって、児童期と思春期の被養育体験、および、その体験に対してどう感じてきたか、どのように異なるのかを知るために、被養育体験に関する記述データの質的な検討を行う。

3. 研究法の選択

本研究では、ひとつの研究の中で量的研究と質的研究の両方を用いることによって、研究課題を総合的にとらえることを目的とする研究アプローチであるミックス法を選択する。

抱井ら（2011）は、クレスウェルら（Creswell et al., 2011）の主張をもとに、ミックス法の特徴を次のように挙げている。

- ① 研究設問に基づいて、量的・質的の両方データを説得力のある厳密な形で収集・分析する。
- ② 2つの形式のデータを、それらを合体する、または統合することによって、順次的に一方をもう一方につなげることに

よって、または、一方に内部にもう一方を埋め込むことによって、混合または統合、連結する。

- ③ 研究の強調点という観点から、一方の優先度を高くするか、両方の形式のデータに同等の重要性を与える。
- ④ 上記の手順を単回調査または複数の段階を含む調査によって実践する。
- ⑤ 上記の手順を哲学的世界観と理論的レンズの枠組みの中に位置づける。
- ⑥ 上記の手順を調査を行う上での計画を方向づける特定の研究デザインに統合する。

本研究は、量的データの収集と分析後に、質的データの収集と分析を行い、最後に全分析の解釈をする、順次的説明デザインを選定する。

4. 一次調査 (量的研究)

1) 目的

本調査に向けて調査対象者の抑うつ傾向を検討する。

2) 方法

- ①調査時期：2012年6月9日～6月19日
- ②調査対象者：関東地区にあるA私立女子大学の学生1、2年の計59名と、B私立工業大学1、2年の計155名（男性142名、女性13名）
- ③手続き：授業の終わりに担当教員と研究者が、口頭で調査の説明および、協力依頼を行った。調査への協力は任意であり、協力のない場合も不利益のないこと、回答は無記名でありさらに、結果は、統計的に処理され個人の回答が特定されないことなどを伝えた。質問紙への回答をもって協力依頼への同意とした。回答はいずれも無記名

で行われた。実施時間は約20分であった。

④本調査への協力依頼：一次調査の質問紙の最後に、本調査への協力依頼と、協力への同意の署名と連絡先をいただくための記入欄を記した。本調査の内容について説明文を記載した。さらに口頭で、協力同意者全員に協力を依頼するとは限らない旨を伝えた。「本調査の内容は、小さい頃のことを更に教えていただくものとなっております。」と記載をして、また、口頭で「署名をいただいても、本調査を全ての方にお願ひするとは限りませんので、ご了承ください」と伝えた。

⑤質問紙

フェイスシート：年齢・性別・現在の家族構成・小学生、中学生、高校生の家族構成、過去を振り返った時によく思い出す年齢の暮らしの記入を求めた。また、本調査に協力しても良いという調査対象者には氏名と連絡先の記入を求めた。

抑うつ尺度：抑うつ傾向を求める尺度として、うつ病自己評価尺度（CES-D；The Center for Epidemiologic Studies Depression Scale）を用いた。本尺度は、1977年に一般人における「うつ病」を発見することを目的として、米国国立精神保健研究所（National Institute of Mental Health：NIMH）により開発されたものである（Locke&Putnam, 1977；日本語版、島1985）。調査施行前1週間における症状の頻度を4段階「ない」「1～2日」「3～4日」「5日以上」により問い、当てはまる場所に○をつけてもらう。得点は、0～60点で、カットオフは16点である。

3) 結果

①分析対象

Table.1 男女別平均値SDおよびt検定

	男性		女性		t値
	平均	SD	平均	SD	
抑うつ傾向	17.31	9.10	22.0	12.2	2.92**

** p<.01

全回答者214名のうち、A私立女子大学で調査項目に不備のある回答者2名を除いた。B私立工業大学の男性142名のうち、調査項目に不備のある回答者31名を除いた。最終的に181名（A私立女子大学57名：B私立工業大学男性111名、女性13名）を分析対象者とした（有効回答率85%）。

②男女別CES-D得点の結果

A私立女子大学57名とB私立工業大学女子13名である計70名と、B工業大学男子111名のCES-D平均得点についてt検定を行った。その結果、男性より女性のほうが有意に高い得点を示していた（ $t(179) = 2.92$ 、 $p < .01$ ）（Table. 1）。

5. 本調査（質的研究）

1) 目的

本調査では、青年期の抑うつ傾向の高低（量的データ）によって、児童期から思春期の被養育体験と、その体験に対して主観的にどう感じてきたかを検討するため、被養育体験に関する記述データの質的な検討を行う。

2) 方法

①調査時期：2012年7月7日～8月31日

②手続き：本調査依頼の具体的な手続きは以下の通りである。

一次調査用紙の一番最後に、本調査への協力依頼を記し、同意の場合、連絡先と署名を記入してもらった。その結果34名から

本調査への協力に同意が得られた。さらに、一次調査により、CES-D得点が0～8点であった者；低群（8名）、9～15点；中群（5名）、16～22点；高群（6名）とした。一次調査において本調査への協力に同意した者の中には、CES-D得点が23点以上の者が15名含まれていたが、質問の内容により、不快な体験が予測されるため、本調査の対象には含めなかった。本調査への協力を依頼する対象者19名に対し、本調査への協力依頼書、本調査（自由記述式アンケート用紙）、本調査の返送用封筒、同意撤回書、同意撤回用の切手を貼った封筒、の一式を一人ひとりに手渡した。時間に拘束されることなく、本調査協力者が時間のある、落ち着いた状態で回答してもらうことを考慮し、各自には家で回答してもらい返送用封筒に入れて、研究室に返送してもらうようにした。

本調査（自由記述式アンケート用紙）の返送をもって本調査への同意とみなした。

③質的研究法

本研究においては、明らかにしようとしている問題に関する理論が存在していないこと、分析単位が心理プロセスであることなどから、修正版グラウンデッドセオリー法を採用した。

④質問紙（自由記述式アンケート用紙）

調査の内容は自由記述式アンケートであり、児童期と思春期の母親の自分への接し方を振り返ってもらい、質問項目に答えて

もらう。自由記述式アンケート用紙に記入されたものを、記述データとした。

本調査では、抑うつ傾向得点の低群、中群、高群の調査協力者が、「小学校1年生から中学校3年生までを振り返ったときに、母親にされたことや言われたことで」、「良かったこと・嬉しかったこと」、「嫌だったこと・悲しかったこと」を記入してもらい、更に「母親の接し方の変化で気づいたこと、感じたこと」、また「最も印象に残っているエピソード」、「当時はどう感じていたか・現在はどのように感じているのか」について質問した。

⑤倫理的配慮

文章に書かれた個人を特定するような情報については一切を削除すること、調査情報の管理についても、個人情報外部に漏れることが無いよう細心の注意を払って管理すること、本調査内容は、修士論文としてまとめ、学術論文および学術的な場での発表においてのみ使用されること、いかなる場合でも、個人を特定できるような情報を公開することは決してないことを明記した。また、一次調査において、書面で同意をした後に研究協力の取り消しができることを明記し、研究協力者が調査に協力するかどうか自由に決められるようにした。また、一旦返送された回答についても取り下げることができるように、『同意撤回書』を同封した。

本調査用紙への自由記述式アンケートにかかる時間については、研究協力者が思い出して書くことなどを考慮し、40～50分程度とした。

また、質問紙への回答によるネガティブな影響をなるべく予防するため、CES-D得点が23点以上の同意者については調査対象に含めなかった。

3) 分析過程と結果

①本調査協力者の概要

調査依頼をした結果、本調査協力候補19名のうち、4名は本調査依頼書などを含む一式を受け取らず、また、2名から同意撤回書が返送された。13名から本調査（自由記述式アンケート用紙）が返送され、13名から承諾が得られた。

②本調査協力者の概要

研究協力者候補の対象となったのは、一次調査に協力してもらったA私立女子大学の心理学を学んでいる学生、且つ、一次調査において、抑うつ傾向得点が0～22点の者である。そこから、低群は0～8点の者、中群は9～16点の者、高群は17～22点の者とした（Table. 2）。

それぞれの群の人数配分のバランスが良く、得られるデータの極端な偏りもみられないであろうとし、人数の増減はしなかった。

③分析までの過程

i 自由記述式アンケートによるデータの

Table.2 本調査協力者の概要

	CES-D得点	同意撤回者	同意者
低 群	0-8	3	5
中 群	9-15	1	4
高 群	16-22	2	4

作成

回収した自由記述式アンケートに記述されている文章をそれぞれ、できる限り短文になるように区切り、以後データとして分析に用いることにした。

ii 研究者バイアスの確認

研究者による分析と併行して、群分けについての情報を知らされていない分析協力者による同様の分析を試みた。この両者の一致、不一致を検討することによって、研究者バイアスの程度を確認することとした。

④本研究者による分析

i カテゴリーの生成

抑うつ傾向の群別けに関係なく、収集した情報を単一の内容毎に分解して（切片化）、分解されたものに短い名前をつけて（ラベル）、それぞれ類似のものと、異なるものにと振り分けた（カテゴリー化）。その後カテゴリーごとに、低群、中群、高群に振り分けて、さらに児童期、思春期に分類した。また、後から郵送されてきた自由記述式アンケートも同様に行った。分類されたものが、そのカテゴリーで良いのか再度確認して、移動が必要なものに関しては移動させたり、カテゴリーの削除や追加を行った。

ii 下位カテゴリーの生成

最終的に、分類されたカテゴリーの中の文脈を考慮しながら、カテゴリーごとに示す意味について解釈し、それを欄外にメモしていった。そのメモを参考にしながら、それらを示す下位カテゴリーとして、下位カテゴリー名と定義を定めた。

iii 本研究者によるカテゴリーと下位カテゴリー修正の過程

生成カテゴリー

一回目にデータから生成されたカテゴリーは、【嫌だったこと・悲しかったこと】については、〈エピソード〉、〈怒られた〉、〈過干渉〉、〈否定的/拒否的態度〉、〈比較〉、〈話を聞いてくれない〉、〈手をあげる〉、〈記憶なし〉、〈そのまま〉、〈認知の修正〉、〈再認識〉の11のカテゴリーであった。

【良かったこと・嬉しかったこと】については、〈喜んでくれた〉、〈物をくれる〉、〈高校受験〉、〈現在の母親への気持ち〉、〈信頼〉、〈褒められた〉、〈話を聞いてくれた/問題解決〉、〈おでかけ〉、〈そのまま〉、〈再認識〉、〈報酬〉の11つのカテゴリーであった。

4度の修正を行い、最終的に生成されたカテゴリーと下位カテゴリーは表のとおりであった（Table. 3）。

⑤本研究者と分析協力者の振り分け比較

カテゴリー命名には違いがみられたが、概念へのデータの振り分けは一致していた。さらに、肯定的、否定的発言も一致していた。研究協力者が、どの群に属しているか知らされていない場合も、知らされている場合もほぼ一致した分析結果が得られた（以下、本研究者と分析協力者による分析は一致するとみなし、本研究者の分析結果のみを記述していく）。

⑥ストーリーライン

ストーリーラインとは、分析結果を生成した概念とカテゴリーだけで簡潔に文章化したものである（木下、2003）。概念は下線で示し、カテゴリーは〈〉で示す。

i 低群

【良かったこと・嬉しかったこと】

Table.3 カテゴリー名と概念名と定義

カテゴリー名	概念名	定義
被養育体験		
褒められた	完璧な達成でなくても褒め	テストで良い点を取ったら、お手伝いをしてくれたなど、完璧ではなくても頑張っている様子がみられたら褒めること。
	完璧な達成への褒め	テストで満点をとったり、賞をもらうなど、目標水準が高いこと。また、それに達成していること。
共有	感情の共有	子どもが嬉しいと感じたことを、母親も一緒に喜び合うこと。
	行動の共有	お買い物や旅行など、母子で行動を共にすること。
見守る	信頼	信頼と思われる態度のこと。
	自主性の尊重	子どもが決めたことを尊重すること。
サポート	物を与えてくれる	子どもになにかしらの物をあげること。
	傾聴	子どもの悩みを聞いてあげること。
	問題解決	子どもの悩みへの問題解決をすること。
しつけ	正当	理由が明確であり子どもが理解できること。
	理不尽	理由が不明確であり、子どもが親の言動や行動に納得をしていないこと。
	過剰	子どもが望んでいないのに対して母親が手出し口出しをすること。
	暴力	子どもに対して暴力をすること。
比較	比較	きょうだいや他人とを比べること。
不一致	期待はずれ	話を聞いてほしいのに聞いてもらえなかったり、迎えに来て欲しかったのに来てくれなかったり、母親にしてほしかったことを母親がしてくれなかったこと。
	おしつけ	子どもに対して、強制的にさせようとする事。
現在思うこと		
変わらない	感謝	現在も母親に、感謝気持ちを抱いていること。
	嫌な記憶	過去も現在も嫌な記憶のままであるということ。
認知の修正	対処	過去の母親に対して嫌な感情を抱いていたけれど、現在では対処ができるようになったこと。
再認識	肯定的な気持ち	現在は、肯定的な気持ちであること。
	否定的な気持ち	現在は、否定的な気持ちがあること。

* は、肯定的表現

抑うつ傾向が低群の者は、児童期の頃に、テストで良い成績をとった時や、学校行事への取り組み方など学業を頑張っていたことに対してや、きょうだい世話や家事などの手伝い、習い事の発表会での出来についての<褒められたこと>について嬉しかったと感じている。それは、完璧な達成でなくても褒めるといったものである。また、色々な場所へ連れて行ってくれたり、部活の応援に来てくれたりと行動の共有というような何か行動に関する<共有>した出来事、学校での話を聞いてくれたという傾聴や、必要であれば問題解決への<サポート>をするといったことについて良かったと感じている。

思春期になると、<褒められたこと>が嬉しかったと感じており、それは完璧な達成でなくても褒めるといったものである。更に、受験に合格したことに対して母親と一緒に喜んでくれたという感情の共有についても嬉しかったと感じている。また、児童期の頃と変わらず、一緒に出かけたり、行動の共有も嬉しいと感じており、感情や行動といったどちらも、一緒に何かを体感するという<共有>が嬉しかったと感じている。

【嫌だったこと・悲しかったこと】

抑うつ傾向が低群の者は、児童期の頃に、門限までに帰ってこなかったので怒られたなどの正当な内容や、外に出されたなど理不尽ともとれる<しつけ>や、きょうだいと比較される<比較>が嫌だった/悲しかったと感じている。

思春期になると、児童期の頃と変わらないが、頼んでもいないのに母親がアドバイスをしたり、何か手を出してしまうなど過

剰なくしつけ>も加わる。

ii 中群

【良かったこと・嬉しかったこと】

抑うつ傾向が中群の者は、児童期の頃に、テストで良い点や作品展にだされると言った学業での出来についてや、お手伝い、習い事での賞をもらった時に<褒められた>ことに対して嬉しかったと感じている。それは、完璧な達成でなくても褒める時と、完璧な達成への褒める時の両方がある。また、休みの日に遊びに連れて行ってくれたり、学校行事には欠かさず来てくれるといった行動の共有という形で、<共有>できる時間が嬉しかったと感じている。また、何かあった時にはすぐに気が付いてくれたり信頼してくれるといった<見守る>姿勢があり、更には問題解決してくれようと傾聴することや、喜ぶと思って物を与えてくれるという<サポート>を良かった/嬉しかったと感じている。

思春期では、<褒められた>ことについて学業についての完璧な達成でなくても褒められたり、行動の共有である<共有>することや、自分のことを信頼してくれたり、自主性の尊重をしてくれる<見守る>こと、物を与えてくれるという<サポート>を良かった/嬉しかったと感じている。

【嫌だったこと・悲しかったこと】

抑うつ傾向が中群の者は、児童期の頃に、悪いことをして怒られたという正当なもの、良しと思ってしたのに怒られてしまった理不尽さを感じる、<しつけ>を、嫌だった/悲しかったと感じている。また、話を聞いてほしかったのに忙しくて話を聞いてくれない期待はずれや、強制的に何か

をするように言うおしつけを<不一致>と感じている。

思春期では、<しつけ>が理不尽なものや過剰だと感じ、また、期待はずれなく不一致が生じている。

iii 高群

【良かったこと・嬉しかったこと】

抑うつ傾向が高群の者は、児童期の頃に、<褒められた>ことに対して、習い事で上手だったと、完璧な達成でなくても褒められたり、テストの点が満点であったり、習い事で賞をとったなど、完璧な達成への褒めを嬉しいと感じている。また、習い事の練習の成果がだされた時に一緒に喜ぶ感情の共有や、一緒に旅行に行ったり遊んだり、卒業式に来てくれたという行動の共有など、<共有>に関しても嬉しかったと感じている。また、問題解決や物を与えてくれるといった<サポート>も良かった/嬉しかったと感じている。

思春期では、習い事で賞をもらうなど完璧な達成への褒めという形で<褒められたこと>や、一緒に旅行にでかけたり遊びに行くと言った行動の共有や、一緒に気持ちになる感情の共有など<共有>と、物を与えてくれるといった<サポート>を良かった/嬉しかったと感じている。

【嫌だったこと・悲しかったこと】

抑うつ傾向が高群の者は、児童期の頃に、理不尽であると感じる怒られ方をしていたり、殴られるなど暴力的である、<しつけ>を受けたことと、他の子と比較されるという<比較>と、迎えに来て欲しかったが、来てくれなかったという母子での<不一致>的な期待はずれが嫌だった/悲しかったと感じている。

思春期では、児童期の頃感じていたものに加えて<しつけ>のなかで、やらなくて良いのに母親がやってしまう過剰さが増している。また、<比較>については無くなっている。

iv 低群・中群・高群の現在思うこと

低群は、児童期や思春期で感じてきたことを通して、嬉しかったことに対しては、感謝の気持ちは<変わらない>。または、改めて肯定的な気持ちを<再認識>している。嫌だったことに関しては、今思うと否定的な気持ちであると<再認識>したり、仕方がないのだという自分の中で対処するという<認知の修正>をしている。

中群は、現在は、当時も今も感謝しているという<変わらない>気持ちと、当時は何とも思わなかったが、今は肯定的な気持ちを抱いていると<再認識>された気持ちがある。また、嫌なことに関しては、<認知の修正>をして自分の中で対処している。

高群は、当時も今も感謝しているといった<変わらない>気持ちを抱いている。また、当時嫌だったことは、嫌な記憶は<変わらない>場合や、自分の中で対処するといった<認知の修正>や、現在は自分のためだったのだといった肯定的な気持ちへと<再認識>されている。

⑦ 各群での比較

抑うつ傾向の低群、中群、高群で、【良かったこと・嬉しかったこと】【嫌だったこと・悲しかったこと】【現在思うこと】で、児童期と思春期のそれぞれを比較した時、次のような傾向が示された。

【良かったこと・嬉しかったこと】

i 低群、中群、高群それぞれに似たよう

な点があること

ii 低群と中群にはみられるが高群にはみられない点がある。または、高群と中群にはみられるが、低群にはみられない点がある。

iii それぞれにしかみられなかった特徴があること。

以下に、i～iiiを詳しく記述する（概念は下線で示し、カテゴリーは<>で示す）。

低群、中群、高群に共通するカテゴリーと概念がみられた。それは、児童期も思春期も共に、何かを<共有>することでの行動の共有である。また、児童期のみ<褒められた>ことの内容が完璧な達成でなくとも褒められたというものであった。

低群と中群に共通してみられたこととしては、児童期に話を傾聴してくれたという<サポート>である。思春期には完璧な達成ではなくとも褒めるといった<褒められた>ことである。

高群と中群では、思春期<褒められた>ことが完璧な達成への褒めであったり、物を与えてくれるといった<サポート>である。

それぞれにみられた特徴としては、低群については、みられなかった。中群のみに、児童期で自分を信頼してくれていたという<見守る>ことについてと、思春期では、信頼に加えて、自主性の尊重がみられる。また、高群のみにみられたものは、思春期のときに感情の共有をすることである<共有>や、<褒められたこと>で、完璧な達成への褒めであった。

【嫌だった・悲しかったこと】

i 低群、中群、高群それぞれに似たよう

な点があること

ii 低群と中群にはみられるが、高群にはみられない点がある。または、高群と中群にはみられるが、低群にはみられない点がある。

iii それぞれにしかみられなかった特徴があること。

以下に、i～iiiを詳しく記述する（概念は下線で示し、カテゴリーは<>で示す）。

低群、中群、高群に共通するカテゴリーや概念がみられた。それは、児童期と思春期の両方でみられた<しつけ>が理不尽な内容なことである。また、思春期では過剰なくしつけも含まれる。

低群、中群に共通してみられたことは児童期での正當なくしつけである。高群と中群の共通点として、児童期と思春期のどちらも<不一致>という、母親に子どもが期待していたが、何らかの理由で期待はずれなことが起こったことがあげられている。

特徴としては、児童期も思春期も<しつけ>で、低群では正當なものであるが、高群では暴力があげられていることである。また、低群の思春期のみ子どもと誰かを比較するという<比較>がみられていることや、中群では児童期に、<不一致>であるおしつけがあげられる。

【現在思うこと】

i 低群、中群、高群それぞれに似たような点があること

ii それぞれにしかみられなかった特徴があること。

以下に、①～②を詳しく記述する（概念は下線で示し、カテゴリーは<>で示す）。

す)。

低群、中群、高群に共通するカテゴリーや概念がみられた。それは<変わらない感謝の気持ちや<再認識>されて肯定的な気持ちになったこと、また<認知の修正>によって、対処するということである。

それぞれの特徴としては、低群のみに<再認識>の中で、否定的な気持ちもあることや高群のみに嫌な気持ちもあること、高群のみに嫌な記憶は<変わらない>ということである。

⑧ 母親の接し方の変化について

本調査協力者自身が記入した【嫌だったこと・悲しかったこと】、【良かったこと・嬉しかったこと】の【小学1～4年】と【小学5年～中学3年】の内容を参考に、「母親のあなたへの接し方の変化で、気付いたこと、感じたことを書いてください」と書いたところ、低群と中群と高群で次のような傾向がみられた。

- i 群ごとで書き方が異なる。
- ii 群ごとで記述量が違う。
- iii 内容が違う。

以下、低群、中群、高群の違いを示していく。

低群では、記述量が、児童期と思春期が同じくらいであった。内容は、児童期のころ、母親がきょうだいばかりを見ていて、自分にかまってくれなかった、頑張ったことには褒めてくれるという内容であった。思春期では、児童期よりも親密さが上がっていく様子が記述されていた。

中群では、「児童期」と「思春期」に別れているが、「児童期」より「思春期」の方が記述量が多かった。内容は、「児童期」では、面倒をみてかまってくれていた

という内容であり、「思春期」では、見守って自主判断をさせる親密さが記述されていた。また、「変化なし」という記述もみられた。

高群では、総合的に見ての変化の過程で書かれていたが、「思春期」以降を示すものが多かった。内容は、「自立への促し」と「話が調和していく」、「変化なし」であった。

6. 考察

本研究の目的は、「青年期の抑うつ傾向の高低によって、児童期と思春期の被養育体験および、その体験に対してどう感じてきたかが、どのように異なるか」であった。

① 被養育体験の共通点について

低群、中群、高群の被養育体験の「良かったこと・嬉しかったこと」「嫌だったこと・悲しかったこと」における共通の特徴は、児童期に完璧でなくても良いから頑張っていることに対して褒められたことや、児童期も思春期も母親と一緒に出かけをすることが良かった、または嬉しかったと感じていることや、思春期での理不尽な叱り方や、過干渉とも受け取れる過剰なしつけを嫌だったまたは悲しかったと感じている。

② 褒められ方の違いについて

抑うつ傾向が低い者は、児童期にもあった完璧でなくても良いから頑張っていることに対して褒められたことが思春期でも継続しているが、抑うつ傾向が高い者は、思春期ではテストで満点をとったり、何か賞をもらったなど完璧な達成に対しての褒めを喜んでいて、目標水準が高いと思われる

る。

③ 本調査協力者が感じている変化について

抑うつが低い者は、児童期の内から自立への自然な促しがあるが、見離すわけではなく、褒められて見守ってくれているということが理解できている。抑うつが高い者は、児童期の記憶が殆どなく、思春期からだんだんと自立を促されている傾向にある。しかし、親密さも増えている。

④ 被験者が現在思うことについて

抑うつが低い者は児童期や思春期に嫌だと思ふ経験をしていないか若しくは深く受け止めていない可能性があり、それに対して抑うつ傾向が高い者は、小さい頃に非常に嫌な体験をしていたか、若しくは嫌な記憶がずっと留まってしまっていると考えられる。

7. 問題点と今後の課題

本研究は、ミックス法という研究で進めた。量的研究では、ある程度のデータ数を集めて研究を行うことができたが、質的研究では本調査協力者の人数が少なかったことから次のような問題点がみられた。

第一に、質的分析を行っている際に、下位カテゴリーの枠に当てはまる記述データが1人の場合があった点である。1人の記述データによってできた下位カテゴリーは削除すべきであったが、本研究では本調査協力対象者の人数が少なく、また、どの下位カテゴリーにも当てはまらない記述データであったため、今回のようになった。

第二に、質問への回答の形がそれぞれ違うため、主語がないデータや振り分けにく

い内容のデータがあった点である。人数が多ければ、使用できない記述データを削除しても、他で補うことができたはずである。今回は削除するか、1人の記述データによる下位カテゴリーができた。

以上のことから、質的研究の対象者を増やすこと。また、人数が少ないのであれば、インタビューの形をとることなどが考えられる。今回の研究では、抑うつ傾向や被養育体験に関わる質的研究を含んだ研究であったため、研究を進める上での限られた時間や協力者への健康への影響を考慮して、人数を増やすことをしなかった。しかし、結果から、被験者の人数を増やしておけば、より説得が高まる結果となったのではないかと考える。インタビュー調査という形ではなく、自由記述という形にしたことについても、被験者の健康を考慮した上での選択であった。

今後、この研究結果から、さらに検証的な研究を進めていきたい。

引用・参考文献

岩壁茂 (2010). はじめて学ぶ臨床心理学の質的研究方法とプロセス, 岩崎学術出版

市毛睦・大河原美以 (2008). 親のよい子願望が子どもの自尊感情に与える影響: 親への依存欲求・独立欲求に注目して, 東京学芸大学紀要. 総合教育科学系 **60**, 149-158.

小川俊樹, 鈴木久美子下, 堀正士 (2003). パーソナリティー特徴と被養育体験からみた抑うつの心理的特質—予備的研究—, 筑波大学, **26**, 235-242.

萱間真美 (2007). 質的研究実践ノート—

- 研究プロセスを進めるclueとポイント, 医学書院
- 川人潤子, 堀 匡, 大塚泰正 (2010). 大学生の抑うつ予防のための自己複雑性介入プログラムの効果. 心理学研究, **81**(2), 140-148.
- 木下健二 (2007). 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GAT) の分析技法, 富山大学看護学会誌, **6**, 21-10.
- 木下健仁 (2008). グラウンデッド・セオリー・アプローチ質的実証研究の再生, 弘文堂
- 北村琴美 (2008). 過去および現在の母娘関係と成人女性の心理適応性—愛着感情と抑うつ傾向, 自尊感情との関連—, 心理学研究, **79**(2), 116-124.
- 厚生労働省 (2010). 自殺・うつ病等対策プロジェクトチームとりまとめについて, <http://www.mhlw.go.jp/seisaku/2010/07/03.html>
- 小林絵里, 山内淳子 (2002). 幼少期の親の養育体験と青年期の親子関係との関連—高校生への調査をもとに—, 山梨学院短期大学研究紀要, **23**, 61-64.
- 島悟, 鹿野達男, 北村俊則 (1985). 新しい抑うつ性自己評価尺度について, 精神医学, **27**(6), 717-723.
- 杉久保英司 (2009). 完全主義と抑うつおよび被養育体験との関係について, 九州大学心理学研究 **10**, 199-205.
- 園田直子・森川美希 (2005). Sence of coherenceからみた大学生の自己概念, 久留米大学心理学研究, **4**, 35-42.
- 田中千穂・三浦香苗 (2010). 大学生の被養育体験に関する意識の研究—児童期における母親の具体的な関わりについて—, 昭和女子大学生生活心理研究所紀要, **12**, 143-157.
- 奏由美 (2005). 現在と過去のソーシャルサポートに対する認知と自尊感情・抑うつ感の関連, 青山心理学研究 (5), 141-144.
- 中西健夫 (2011). コミュニケーション研究法, 199-213.
- 村本詔司 (2008). 臨床心理学における研究倫理, 神戸市外国語大学, **26**, 3, 362-373.
- 山川法子 (2001). いわゆる「よい子」の特徴および「よい子」を作り出す規定因に関する考察, 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要教育科学, **48**(1), 45-55.